
怪盗ジゼルの慌しいお仕事

神崎ミア

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

怪盗ジゼルの慌しいお仕事

【Nコード】

N3101Y

【作者名】

神崎ミア

【あらすじ】

颯爽と姿を現し、その美しい容姿から人気を博す大泥棒ジゼル。その夜の顔を持つ少年春斗は、大胆不敵なジゼルの姿からは想像できない所謂ヘタレな少年だった。ジゼルの目的は美術品に憑依した悪魔を祓う事。今夜も闇夜に現れるジゼルだが、その先々には様々な困難が待ち構えていて…?!

プロローグ

「いたぞ、逃がすな！」

黒く、細長い影が一筋伸びている。それはとても人が立てるような場所ではなく、その人物の運動能力の高さが伺えた。

何しろ彼がバランスよく立っているのは美術館の屋上の更に頂上に聳える、旗の上。ようやくつま先が旗のてっぺんに乗っているという状態だ。

旗の下にはぐるりと警官、警備員が取り囲み、美術品を抱えている少年は正に絶体絶命といった所だろう。

だが表情には微塵もそんな気配を持たず、静かに獲物を見定めるように取り囲んだ複数の大人たちを見下ろし、少年は息を少し吸い込んで小型マイク越しに高々と告げた。

「どうも警察、並びに警備員の皆様方、今宵も役に立たない狂犬病の犬のような顔をぶらさげてご苦労様です」

少年がそう告げると周りが反論しているのかざわめく。だがそんな声など全く届かないかのように涼しい顔で少年は続けた。

「わたくしジゼルは今回お仕事を完了しましたのでこれで失礼致します」

とん、とつま先に力を入れて、少年は背中から自ら警備員達の群れに飛び込ように落下してゆく。

呆気に取られていた彼らを尻目に、どんどん降下した少年はゆっくりと体制を整え、ふざけるように敬礼してパツ、と煙のように姿を消してしまった。

旗の周りには無数の警官、警備員の海。ここから逃げられるはずもないと捜すように指示を飛ばすそれぞれの指揮官。だが人数が逆に混乱を招き、その日もまた、ジゼルは深い暗闇に姿を消したまま現れることはなかった。

怪盗ジゼルの慌しいお仕事

「おい、聞いたかよ、昨日のジゼルの事！」

朝。

健全な高校生が起きて真っ直ぐ登校している時間。既に学校に着いて今日の授業内容を確認していた吾妻春斗あがつま はるとは、同級生の桂木慧かつらぎ まいに突然声を掛けられて苦い笑みを浮かべた。

彼の両手にはどこから入手したのかジゼルの愛らしい姿のフィギュア。そしてブロマイドが握られている。

その両方に嫌な視線を送って、春斗は小さく頷いた。

「うん…新聞部が号外配ってたね、貰ったよ」

「おっ、見せてくれよ！俺当番で早かったから貰ってねえんだ！」

慧は根っからのジゼルファンで、彼が怪盗として名を馳せる前から

の古株だ。恐らく両手のグッズも、そのファン同士の交流で手に入れたものだろうが、慧は一つだけ勘違いをしていた。それもファンあるまじき所なのだが…

「それにしてもジゼルちゃん…可愛いよなあ！俺もこんな彼女欲しいなー」

「…そう…かな」

ジゼルの性別は格好が格好だけに、判別しにくいが大体のファンは男であることを知っている。にも関わらず女性だと勘違いしている友人に、男であると指摘して幻滅させることも出来ず、こうして何年も女性だと信じ込んで崇めているのだ。

その正体こそ、眼前の大きな眼鏡をかけて長い髪を一つまとめにしたやぼったい少年であるとも知らずに…。

「次…何処に現れるのかなー俺、一度でいいから生のジゼル見てみたいんだ！」

「えっ、やめておいたほうがいいんじゃない?!」

「何でだよ、ファンサークルでも出没場所を特定するのが難しいらしくて、俺には情報回ってこないしさー…あー家に何か盗みに来てくれないかなー何もねえけど」

「き、きつとがっかりするよ…やめておきなって…」

「なにぃ？春斗まさかお前…」

急に声のトーンを下げ、詰め寄ってきた慧に一瞬ドキッと心臓を振るわせた春斗だったが、この鈍感な慧が春斗の正体に気づくはずもなく。

「ジゼルのファン…なんだろ？」

「へっ…?」

「なあ教えるよー！次、何処に現れるのか！」
「し、知らないってば！ファンでもないし！」

疑るような視線で見つめられ、どう話を切り替えるべきかと困っている、春斗の携帯電話が突然音を鳴らし始め、これ幸いと春斗は急いでポケットの携帯を取り出してディスプレイを見る。
そこには大きく、吾妻海斗あがつまかいとと表示されていた。

「に…兄さんからだ…もしもし」

『今すぐ走って息を切らして三年棟まで来い、以上！』

ブツン！と用件を数秒でまくし立てられ、通話を一方的に遮断された春斗は、少し呆然と携帯を眺めていたが、やがて深いため息と共に椅子を引いて席を立つ。

慧は早すぎる通話に驚きつつも、退室しようとする春斗を呼び止めた。

「おいっ、何処行くんだよ？！HR始まるぞー」

「ごめん、兄さんからの呼び出しなんだ、適当に言い訳しておいて」

「あ、おいっ、春斗！」

慧の呼び止めにも振り返らず、教室を走って出て行った春斗の背中を見つめ、慧は呆れたように一言呟いた。

「ま…あいつの兄ちゃん変だしな…」

第一章 海の女

海斗からの呼び出しから数分、指定した通り三年棟まで息を切らして走ってきたジゼルだったが、待っていた相手はそれでも不足、といった様に不機嫌そうな顔で仁王立ちしていた。

彼を一言で形容するならばあどけない少女。

真っ白な肌に淡い髪色。そして大きくりつとした両目は今はやや怒りによつて釣り上がっていて、それすらも愛らしい。改造した制服を着用しており、胸には女子用リボン、スラックスの代わりに半ズボン姿でこれも特注品。身長は背の高い春斗の半分もないのではないかと言つぐらい小さく、つい守つてあげたくなる容姿だろう。

彼こそ、春斗の兄、吾妻海斗なのだが、一見すれば海斗が弟にしか見えない。

不機嫌な様子の海斗に、春斗は恐る恐る尋ねた。

「ごめん…待った？」

「まったく、この俺様を待たせるなんて随分偉くなったもんだな？いいから人少ない場所に移動すつぞ」

「もしかして仕事のこと？」

「そうに決まつてんだろ、俺がお前にそれ以外の用事で何の理由があるつてんだよ、いいからとつとついでこい」

見た目の可憐さからは想像できないような粗雑な言葉でそう返し、海斗は歩き出した。

怒っているのもそうだったが、仕事、という一言で春斗の気持ちはぐつと下がり、小さな背中を見つめて決心したように声を上げた。

「やっぱり僕…嫌だよ…」

「ああ？何がだよ？」

「そのっ、…泥棒するの…」

「はあ…お前な…この仕事は、誰かが必ずしなきゃなんねーんだよ、5代目ジゼルを継いだ以上、お前はこなす義務があるだろうが」

「そう…だけど…」

「あー！うぜえ！ぐちぐちぐち女々しく反論してくんじゃねえ！黙れ、殺すぞ！」

見た目のギャップがやはり拭えないが、中々迫力ある声でそう脅され、肩を震わせて黙ってしまった春斗に、海斗はため息をついて再び春斗に背を向け、廊下を睨む。

「泥棒じゃねえ、そう考えたらいいだろうが」

海斗なりの優しさで声を掛けたつもりだったが、その言葉に暫く逡巡していた春斗は口を開き、でも、けど、だって…と続けるものだから、気の短い海斗は青筋を立てて春斗の上着を引っつかむ。

「あーもう黙れ！やっぱり反論すんな！俺お前がほんっつと嫌い！」

随分正反対に生まれたものだ。血の繋がった容姿の似てない兄を見つめて、春斗は暢気にそう思っただった。

「今回は星ヶ岳美術館。ここのホールに飾ってある海の女、という絵画を盗む…というより被う」

「絵画…」

「中々絵がでかいからな…俺が今回もアシストするが、今回は盗む、というより被うことを優先させる。被ってしまえば盗む必要もない」

「そっか…うん…」

「地図はこれだ。予告は今日ポストに投函した。警察にバタバタ動き回って頂いて、ヤツを起こしてもらわなくてはならない」

「わかった」

小さな地図を眼鏡に触れ合うほど近くで眺めて、胸ポケットに仕舞い込む。本番に

強い性格なのか、仕事の最中上がったり、失敗することは少ない春斗だったが、まだ経験が浅い為、海斗が毎回アシストをしている。

ジゼルのビックマウスっぷりも、全てマイク越しに海斗が代弁している為だ。

「何かあったら連絡しろ、後はいつも通りだ、いいな」

「うん…わかった…けどさ、いつも警察の方々に啖呵切るのはどうかな…」

「うるせえな！これは代々ジゼルの口上として伝えられてんだよ、お前もいい加減一人で言えるようになれ！」

「えー？あんなに下品ではないと…」

「お前はほんとうるせえな！」

「痛い！」

ごちん、と拳で脳天を叩かれ、子犬のように叫んだ春斗に、海斗は再びため息を吐き出す。本当に大丈夫だろうか、毎回ながら思う不安に顔はくっ、としわが寄り、幼い顔が急に大人びて見える。

「ともかく決行は今夜八時。部活あるなら早く切り上げてなるべく誰にも見られず屋敷に帰ってこいよ」
「はいはい」

一話

夜。

大きな月が闇夜にぼつん、と浮かぶ中、星ヶ岳美術館は異様な空気に包まれていた。

高いフェンスの前にはもう閉館しているというのにジゼルを一目見ようと多くの一般人、そして報道者とその車が囲み、館内にはいつジゼルが現れるかと警察が辺りを睨みつけている。

時刻は約束の十二時を回り、美術館の鐘が鳴り響いた。

「皆さん、ライトをこちらに」

高々と、マイクを通した音声で鳴り響き、あつという間にその一言だけで観衆を歓喜させ、大きなどよめきが巻き起こる。ジゼルに当てられた巨大なライトは警察のもので、彼は相変わらず高い位置から登場してみせた。だがその姿はカメラどころか近くに居た警察の目にも映っておらず、周囲を圧倒するその華麗な登場に人々は暫く、ジゼルから目を離せなかった。

「では今宵は、こちらに展示されている、海の女を頂いて参ります」
すつ、と垂直にジゼルは建物の最上階から飛び降り、いつの間にか仕掛けていたのか壁のワイヤーを頼りに窓ガラスを突き破ってすぐ下の階に飛び込んだ。

警察達はジゼルが向かった方向に配置していた数人に応援を呼び、ジゼルを捕獲するべく走り出した。

長い髪をさつと振り払い、ジゼルは飛び掛ろうとする警察に何食わ

ぬ顔で催涙弾をぶつけ、そのまま俊敏に駆けてゆく。その速さは催涙弾を浴びせられては到底追いつくことも敵わず、その場にいた警察官数人はすっかり床に伏せてしまった。

「俺、実はジゼル見るの初めてなんだ」

こんな事態にも気づかず、海の女が飾られているホールの警備をしていた警察官二人の話し声が聞こえ、ジゼルはふと足を止める。

片方の警官はふうん、と適当に相槌を打ちながら欠伸を噛んでいる。ジゼルは暫くその二人を見つめ、そつとその場を後にした。

「すみません！」

「ん…？」

そんな二人の前に、まだ若そうな青年が駆け寄る。服装はまだ袋から出したばかり、といった風なピカピカの制服に身を包んでおり、一目で新人だと伺えた。

「実は、俺新人で…どこの警備か忘れちゃったんですけど…俺…何処に行ったら？」

「新人か、新人なら庭の警備だろ」

「しつかりしろよ」

「あはは、すみません、えっと…庭はこっちですね…」

「あ、おい、背中にゴミが…」

新人警官が踵を返すと、その背中から細長い何か紙切れのようなものがぶらさがっており、一人の警官が呼びとめ、それを引っ張り出す。紙には何か書かれているようで、その隣の警官もつい足を止め

てその紙を眺める。

「残念…ハズレ？なんだこりゃ…？」

新人警官、もとい変装したジゼルはニヤリと微笑んで、背後のスタングンのスイッチを入れた。

「大変です！ジゼルの狙いは海の女ではなく、メインホールに飾られている彫刻だったそうです！至急メインホールに移動してください！」

「何ッ！？やはりこの作品はおとりか！」

変装したジゼルだとも知らず、息を切らしてきたかのような新人警官を見てホールに待機していた警官たちは一斉に駆け出した。元々、海の女の作者は無名で、作品自体に値打ちはない。

そのため、こちらの作品はおとりなのではないか、という疑惑が警察内でも浮き上がり、すっかりそれを逆手に取られたというわけだった。

誰も居なくなつたホールで一人、変装を解いたジゼルは巨大な絵画、海の女を見つめて絶句した。

今夜この絵画に憑依している悪魔を祓わなければこの絵画を持つていかなくはならない。だが抱えられぬどころか、何か大きな機材でも使わなければならぬほどの大きさだった。

しばらくしげしげとその絵画を見つめていると、そんなジゼルをず

つと見ていたように声が掛かった。

『随分手馴れてるな』

一瞬、警官かと立ち止まり辺りを見渡したジゼルだったが、その声は自分の目の前から聞こえていくことに気がつき、顔を上げる。絵画のすぐ下に小さく体育座りをした男性を見つけて、ジゼルは深く息を吐き出した。

「天野修也さん…ですね？もう貴方は命が無いことをご存知ですか？」

『知ってる。俺が死んだのはこの作品が描き終わった頃だもんな、覚えてるよ』

目の前の男は既に、海斗が調べていた。この海の女の作者、天野修也。

若くして画家としての才能を芽生えさせた修也は、その活躍を世に広めることなく若くして病気にて他界。ここに居る修也は既に人間としての存在を保っておらず、彼のような幽霊が悪意を持って人を襲うようになれば、ジゼル達が呼ぶところの悪魔となってしまう。

一般的には悪霊、といった風に呼ばれているが人間に危害を加える際、その体を自分のもののように内側から蝕む姿がまるで映画に出るような悪魔のような姿に似ている所から、代々ジゼルはそう呼ぶようにしている。

「では…そろそろ成仏なさらないと、貴方はもうすぐ悪魔になってしまいます、僕は貴方のような方を助ける為に怪盗をしているんです、大人しくしてください」

『ゆるい！と怪盗、どーゆるー繋がりがあるんだ？まあいいけどさ…』

俺はまだここを離れるわけにはいかない、作品が完成するまでは…」

「えっ…？それはどうゆう…」

『じゃあな、怪盗さんわざわざアンタも大変だな。でも俺の絵なんか盗んでくれようとするなんて、わかってるね、アンタ』

「あ、ちよつと！」

すつ、と立ちあがった修也は、そのまま絵画に溶け込むようにして姿を消そうとしていた。

ここで逃がしてしまったては、この絵画を盗んで屋敷に持ち帰らなくてはならない。ジゼルは必死にその腕を掴むように手を伸ばすが元々死人、上手く腕を掴むことが出来るわけもなく、ジゼルはそのままバランスを崩して倒れこむ。絵はまるでそんなジゼルを拒絶するかのように薄い膜を張ってホールは静寂を取り戻した。

「うわっ、何これ、触れないッ！」

絵に触れることすら出来なくなったジゼルが悪戦苦闘していれば、メインホールのダミーがあっけなくバレってしまった為、駆けつけてきた警官が扉勢いよく開き、ジゼルはハッとして振り返った。

「よくも騙してくれたな！捕まえろ、絶対に逃がすな！」

「ええええっ！？ああ、もう今日は引き上げるしかないか！兄さんごめん、失敗した！」

取り押さえようと掴みかかる警官をひらりとかわし、部屋から一番近い窓に向かって突進したジゼルは、そのまま窓を再び突き破り、外に飛び出した。

警備を敷いていた庭は獰猛な警察犬などが叫び声を上げ、宙に浮かんだジゼルを見上げる。

ジゼルはそのまま落下することなく、闇夜に姿を消してしまった。

窓からジゼルのマントを掴もうとしていた警官達は大きな舌打ちをし、無事に姿を残す絵画へと、不思議そうに視線を送るのだった。

三話

怪盗ジゼル、まさかの失敗？星ヶ岳美術館の海の女は無事。

新聞の一面を大きく飾る記事に、海斗は深いため息を一つ、分厚いその新聞紙を見事にくしゃりと握りつぶし、足元で土下座して動かなくなってしまうた弟の春斗を見下ろす。

掛けてやりたい言葉は沢山あるが辛らつなものしか浮かばない。そんな言葉を掛けてやりたくもなるジゼル史上稀に見る汚点であったが、小動物のように震えている相手をそう躡ることも出来ず、やはりその小さな唇からはため息が漏れるばかりだった。

「あのな…。別に美術品を盗まないのはよくあることなんだよ…悪魔か幽霊を被えばそれでいいんだからよ…でも口上も何もなしに逃げて帰ってきたとあっちゃあ…親父が黙ってないぞ、これ」

「申し訳…ないです」

「はあ…、こんな見出しまで出されて…馬鹿だな！お前、正真正銘の馬鹿だろ！」

ぱっ、と顔を上げた春斗の目には大粒の涙が浮かんでおり、心底嫌そうにその春斗の顔を見つめて、海斗は指で背後に来るように指示をする。

「もういい…肩もめ…もう疲れた。お前がホールにいる間眠り薬で警官足止めするのも大変だったんだぞ！」

「うつつ、ごめん…兄さん…。今度は被ってくるから…」

「ったくしつかりしろよ。表向きは怪盗で派手にやってるけど、俺たちにしかあいつらは目に見えない。活動時間は夜で、調度一年で

この世に未練がある霊は悪魔に成り果てて人を襲う…。」
「兄さんは怪盗していた時…こんな目に遭ったらどうしていたの？」
「そりゃ捕まれば終わりだからな、逃げはしていたが目的はちゃんと果たしていたっつーの。ま、言っても俺がジゼルだったのはたったの二年だけだからな…。」

先代ジゼルである海斗は二年間、ジゼルの衣装に身を包み春斗と同じように美術品や悪魔に憑依された人間の元に現れては被い、生活をしていた。

春斗達が住む屋敷は祖父の代から続く怪盗業のお陰でもあったが、それも盗んだ美術品の処分に困ったこと。彼らの本来の目的はこの世に蔓延る目に触れられぬ存在との対峙にあった。

ものすごい労力を払って行うこの慈善事業も、訳があるのだが、春斗はそれを知らずにいる。

尤も、後に知ることにはなるのだったが…。

翌日。

学校が休みともあり、星ヶ岳美術館を訪れた春斗は、その人の多さに驚き、館内を見渡す。

すっかりジゼルが仕留めそこねた海の女のベースは行列が出来、その絵を一目見ようと外にまで人が溢れていた。チケットを購入し、まざまざと昨日の仕事の失態を見せ付けられたようで、春斗は一人、いたたまれない気持ちで群集を眺める。

「あれ、春斗じゃん!」

「げっ…慧…」

春斗が振り返るとそこには、両手一杯にジゼルのグッズを抱えた慧が立っていた。

美術館で販売されたジゼルのグッズなのだろうが、春斗はそれを見て改めて嫌な顔をする。当人の慧といえばにやにやとだらしない表情をして、春斗の肩を叩いた。

「何だよ、やっぱりお前ジゼルのファンなんだろー隠すなよー！今丁度海の女を見に行こうと思ってたんだ、一緒に行こうぜ」

「あ、ちよつと…！」

「ほら、早くしないと閉館しちゃうぞ、なんたつて今あの絵を数秒見るだけで一時間は並ばないといけないからな！」

「…まるでアトラクション待ちみたいだね…」

慧はそのまま強引に春斗を海の女を見るための列に引き込む。

この美術館に訪れている殆どの人間が昨夜のジゼルが盗もうとした絵を見たがっている。

そんな大それた事をした少年が今まさにすぐ側にいるというのに誰もそれに気づくことはない。春斗は奇妙な気持ちになりながら、絵のあるホールを眺めた。

（修也さん…大丈夫かな…）

ふと米粒のように人が並ぶ列の脇に、一人絵を見つめるわけでも、並ぼうとしているわけでもない少女を見つけ、春斗は目を奪われる。彼女の顔には見覚えがあったが、名前が出てこない。

前に悪魔を被った人間だっただろうか、はたまた美術品を盗んだ屋敷の娘か。

考えを巡らせていると、急に彼女の名前を思い出した春斗は、慧に振り返って告げた。

「ごめん、やっぱり僕時間が惜しいから今度来るよ…慧は楽しんでいて、あ、これパンフレットもあげる」

「お、おい、折角並んだのに何処行くんだよ、春斗!？」

列の脇に設置されていたロープを潜り抜け、春斗は慧に振り返ることなく走り去った。

慧はまたしても置いてきぼりを食らい、自分も貰った美術館のパンフレットに視線を落として小さくため息をついた。

「あのっ!」

人ごみから先ほどの少女を見つけ出した春斗は、努めて大きな声で少女を呼んだ。

一瞬、自分の事とは分からなかった少女がきよとんとして立ち止まった為、春斗は少女の目の前まで回りこみ、少女がちゃんと名前の子と合っているのを確認して笑顔を向けた。

「あなた、あまのしおり天野梨さんですね？」

「…どうして、私の名前を？」

「僕の名前は吾妻春斗…お兄さんのその…知人で…あの絵のことに…
ついて尋ねたいんです、何故、未完成なのかを…」

「兄のお知り合いの方…そうですね…初めまして、あの絵が未完成であることを知っていたのは貴方が初めてです、私もお話を伺ってもよろしいですか？」

春斗は梨が不審がっていないことに安堵して、二度ほど頷いて踵を返した。

「じゃあここではなんですし、下のレストランでお話しましょう」
「はい」

菜の表情は浮かなかつたが、静かに頷きそう返した為、春斗も歩き出す。

彼女は天野修也のたった一人の妹、天野菜。

何となく写真を目にしている顔と名前を覚えていたのは奇跡ともいえだ。春斗は後ろからついてくる彼女に不審がられないよういかに情報を引き出すべきか考えながら、携帯を取り出し、海斗にメールを送る。

「天野菜さんに接触することが出来たから、修也さんの出来るだけプライベートなことを教えて」

返信はすぐで簡潔だった。

「わかった、今添付したデータを開いて目を通しておけ」

四話

美術館地下のレストランは、あの美術館の盛況振りが嘘のように、人の姿がまばらだった。空いた席に腰掛け、栞と向かい合った春斗はまず、何を言ったらいいか考えた。

俯いた彼女は言いたいことがあるそうだが、さすがにいつい先ほど顔を合わせたほど初対面の相手に何を話したらいいのか、彼女もきつと迷っているのだろう。

ここは場を和ませようと、春斗はにっこりと笑顔で栞に話しかけた。

「それにしても、修也さんの絵は優しくていい絵ですよ。実は星ヶ岳美術館で海の女を見るのは二度目で…今回はジゼルの騒ぎがあったからまた見たくなつて見に来たんです」

「兄の絵を…そんな風に言つて下さるなんて…嬉しいです。兄の生前にはあまり誰からも評価を頂かなかつたので…」

「そうですか…残念です…僕はとても気に入っているのに」

案外嘘でもない一言を呟き、適当にメニューをめくる。

栞は今の会話で若干緊張が解けたのか、彼女も笑顔を返して話を続けた。

「そういえば…あの作品が何故未完成か…でしたね…未完成であることは兄から？」

「ええ…」

「実はあの絵は、二枚で一つの作品…なんです」

「二枚で？」

春斗は栞に気づかれないうつ、携帯にメモを取りながら顔を上げる。

「あの絵、でかいでしょう。この美術館には展示スペースが少ないからって断られたんです。元々兄の絵をここの館長さんが気に入って下さって…それで置いて頂けることにはなつたのですが…」

「絵の大きさから二つは飾れないと…」

「私…悔しくて…」

制服姿の栞は、自分の制服のスカートをきゅっ、と握り締めながら目に涙をためた。

春斗はおろおろと栞が泣きそうになっているのを慰められず、困っている、栞はふふっ、と小さく笑って涙を拭った。

「ごめんなさい…その…館長さんから昨日、電話が来たんです」

「えっ？どんな？」

「ジゼルのお陰で海の女を見に来る人が増えたから、もう一枚を絵を買い取らせて欲しいって…」

「な、なんて自分勝手な…」

「それで…私も断ってしまって…兄になんて謝ればいいか…私…」

ついに顔を覆って泣き出してしまった栞に、春斗は鞆からハンカチを取り出して栞に差し出す。

栞は差し出されたハンカチにきよとん、としていたが、やがて静かに受け取り、涙をふいてありがとうと述べた。彼女が断つた以上、修也の悲願を叶えることは出来そうにない。

だが春斗には一つ、秘策が思いついていた。

「謝ればいいんです」

「えっ？」

「お願いがあるのですが、一つ、引き受けてはもらえませんか？」

夜。
すっかり来場客も消えた美術館で、春斗は厳重な警備を眺める。
リベンジともあり、海斗も隣に居たが、その格好は普段ジゼルが着用しているものと似た衣装で、表情は暗い。

「はあ、久々にこんな格好にさせられると思わなかったぜ…今度は失敗すんなよ…」

「わかってるよ、父様に叱られちゃうものね」

バサツ、と体をマントに包み込むと、数秒で剥ぎ取り、マントに包まれていた体は包む前とは打って変わり、丸みを帯びる。他校の制服に、セミロングの黒髪、愛らしい表情の少女、朧に変身した春斗はにっこりと笑って海斗にピースしてみせる。

「どう？完璧？」

「おう…お前変装術だけは得意だよな…ともかく、俺がおとりになっ
ていられんのも数十分、すぐに蹴りをつけるよ！」

くん、と自分の身長のご二倍はあろう鉄格子を飛び越え、海斗は美術館の方向へと走り出した。

朧の姿となった春斗もそれに続き、鉄格子を飛び越える。

丁度春斗の足が地面に着いた瞬間、鋭い警官の声と犬の鳴き声が響き渡った。

「いたぞ！ジゼルがやっぱり現れた！今日はなんだかちっこいぞ！」
「うるさい！黙って追ってこいのるま共！」

（大丈夫…かなあ…）

追ってくる警官の一言に激昂して反論しながら逃げる海斗を思い、
春斗は心配になりながらも美術館の壁を登るべく、歩き出した。

窓を割ると警報が鳴る為、ゆっくりと窓の棧に指先を引っ掛け、起
用に押し開けた春斗は、警備が薄いことを確認して海の女のベース
へと歩いてゆく。

既に海斗がここから誘導したのか、警備はされておらず、あっさり
とホールに侵入した春斗は絵の付近まで歩み寄った。

『誰…か…いる…のか…？』

声がすぐにした。

その声は激んでいて、修也のものだとは気づいたが、様子がおかし
い。

しゃがみ込んで薄いその体を覗き込むと、修也は苦しげに顔を上げ、
口を動かした。

『しお…り…？しおり…なん…でっ…！』

「天野さん、しっかりしてください！」

春斗が触れようとした瞬間、修也からどす黒い煙が一齐に噴出し、
修也は悲鳴を上げる。

春斗は煙が口に入り込まないように口を押さえ、悪魔と変貌してしまった修也に、苦い表情をした。既に、己の自我を失くしたようにぐったりとした異形の姿。

体は犬のようであり、蛇のようにうろこがある。長い尾を力強く振り上げ、地面を叩きつければ、地震が起きたかのような大きな揺れが美術館を包み、外も中も全ての照明が一度に消えうせた。

「天野…さん…」

牙のびつしりと生えた口を大きく開き、咆哮をする姿はもはや人間だった事すら忘れてしまうようで、春斗はつい、目を逸らして俯いた。遅かった、自分が昨日助けられなかったから。様々な気持ち溢れ出し、春斗はやるせなさから立ち尽くし、そんな春斗の巨大な爪が振り下ろされようとしていた。

五話

振り下ろされた爪は、見事に春斗の腹を抉るように命中し、血が出るような傷がかるうじて出来なかったものの、そのまま軽い体は吹っ飛ばされて壁に激突する。

腹部に強いダメージを受けた為か、春斗は大きく体をしならせて吐血し、その場にうずくまって動けなくなってしまう。

その衝撃でカンカン、と春斗の体から何かが飛び出したが、このホールにいる悪魔がそんな事を構うはずがなく、春斗は霞む視界で修也だった悪魔を見上げた。

「あまの…さんっ…！」

「お前のお陰がなければ、見に来るものが一人だっていやしないこんな絵の完成を待ち続けた俺を、笑いに来たのか…」

修也の声に混じり、低く野太い声が混じっている。ぎりぎり修也の自我が残されているのか、ジゼルだと気づいた修也が春斗にそう尋ねる。

頭の中に直接響くような不快な音声に顔をしかめっていると、体を指先で持ち上げられ、春斗は息を詰まらせて小さく呻いた。

「答えるよ、怪盗ジゼル…なんの為に…なんの為に俺の絵なんかを

…！」

パン！と再び振り下ろした尾の先が、先ほど春斗が落としたものに軽くぶつかり、カチツ、と小さな音の後、突然修也が聞きなれた優しい声が、ホールに響いた。

「お兄ちゃん、あのね、私。 栞…だよ」

『し…栞…？本物の…の？』

「実はお兄ちゃんの絵の片方を、展示しないで下さいって言ったの、私なの、怒ってる？けど、許して欲しいな、私ね、お兄ちゃんの絵が、一番好きなの、だからいいでしょ」

指先から春斗の体がこぼれ落ち、春斗の変身はふっ、と解けて倒れこむ。

声を聴いてから、先ほどまでの邪悪な煙が徐々に薄くなり始め、最後の一言には春斗の変身のように体は修也のものへと変わっていた。

「私がああ絵の片方を、独り占めしても…ごめんね、お兄ちゃん、天国でも、幸せにね」

『しおり…っ…』

ぼろっ、と幽霊であるはずの修也の瞳から涙のような淡い光が漏れ、伝ってゆく。

春斗は上半身をゆっくり起こすと、緩く微笑んで彼の絵を見上げた。

「居たんじゃないですか…唯一、心から貴方の絵を愛する人が…」

修也の心の中に、ふわりふわりと過去の思い出が甦る。

何気なく、栞と過ごした、家族と過ごした日々、そして楽しんで絵を描いていた日々。

人が、走馬灯と呼ぶものが遅ればせながら流れてゆき、修也は静かに目を閉じた。

『ジゼル…』

「はい」

『昨日は悪かった…それともちろん…今日のことも…もう未練もなくなつたよ、ただ…一つだけお願いしていいか？』

「ええ、構いません、何ですか？」

『

用件を言い終わると、

修也は清々しい笑顔で光の粒となって消えてしまった。

今回は自ら被うことなく、修也が成仏した事で、ほっと安堵を一つ、春斗は困つたように微笑んで、横になつたまま、彼の巨大な絵を再び見上げた。

「さて…もう仕事頑張ろう…！」

「待て！ジゼル！」

「ったくうじゃうじゃうじゃうじゃ、うぜえっ！いつそ纏めて爆発させてやるつか！」

「兄さん！」

警官から数十分、春斗と修也の出来事も知らず、追いかけてこをしていた海斗は、不意に声を掛けられて正面を見遣る。そこには満身創痍のジゼルの姿をした春斗と、開け放たれた窓からぶら下がったロープ。

そして何より目を惹いたのは、春斗の体より大きな美術品。

海斗は言いたいことを全て飲み込み、春斗の手を掴むと、追いかけて

てきた警官二人に同時に振り返り口角を上げて言い放つ。

「それでは、ごきげんよう」

窓から足を離し、ロープの先にあるへりに揺られて、二人は美術館を飛び立った。

美しい月夜の夜、再び姿を消した二人のジゼルに圧倒されながら、短い夜はあっという間に更けてゆくのだった。

翌日、ジゼルに盗まれた絵画のニュースを眺め、栞は残念そうにテレビの電源を落とす。

学校へ行く為、食べかけのパンを口に押し込み、クツも同じようにかかとを押し込む。

まだ薄暗い朝、ドアを開けると何故だか数センチしか開かない。開いた数センチから何が挟まっているのか確認した栞は、あっ、と声を出して驚き、ドアを強引に開いて立てかけられていたものをみて立ち尽くす。

そこには昨晚盗まれた絵画、海の女が綺麗に衝撃吸収剤に包まれて置かれていたのだ。

栞は暫く驚いたまま、一人の少年を思い出していた。

「…まさか…ね…お母さん、お母さん、大変だよ、お兄ちゃんの絵が！」

『この絵を愛する人だけに見せていたんだ、お願いしてもいいだ
ろっか』

第二章 偏屈男の壺

「あ、あー！ー！ー」

蜜色に輝く柔らかな色、その上に絶妙にかけられたカラメルソース。春斗の大好物である有名な菓子店のプリンを、わざわざ病室で見せびらかすように食べていた海斗は、にやりと笑って噛んだスプーンを動かした。

海の女を盗む際、派手に怪我を負ってしまった春斗は、全治数ヶ月、アバラが数本折れていて起き上がるのもやっとの状態だった。

見舞いカゴ一杯に入ったプリンが一つ、また一つと無くなってゆくのを涙目で見つめながら春斗は海斗を睨みつけた。

海斗はそんな春斗の視線など屁でもないように空のプリンのカップをくずかごに投げ入れた。

「親父が頑張ったお前につてさ、まあアバラが折れていて体も起こせないんだ、食えないんじゃないじゃあ腐らせても親父に悪いよな？」

「食べさせてくれたっていいじゃん！」

「誰がそんな寒いことするかよアホ、全部食うぞ」

「や、やめてよおー！」

はあ、とため息をつき、噛んでいたスプーンを口から離れた海斗は、ぐいっと春斗の病院着を引っつかみ引き寄せる。アバラが折れているというのに強引な海斗の行動に驚き、痛がっていると、海斗は低い声で告げる。

「これでわかっただろ、悪魔ってのは自在に姿を想像したままに出

来るんだ。俺や、お前のように」

「で、でも僕たちは悪魔じゃな…」

「そうだけど、本質は、一緒なんだ」

パツ、と春斗の服から手を離し、椅子に深く座り込む。

春斗の家系は代々、ジゼルの姿をしている時だけ、特殊な力を使うことが出来た。

それは春斗が朧に変身してみせたように、自分の想像が、力となる。力を使っている時は額にランプのダイヤのようなマークが現れる為、ジゼルは額の出るような髪形をしているし、現在は隠れるように長い前髪を無意識にしている。

そしてその力を使って、悪を征しているのだ。

「今度お前が下手をすれば死ぬし、お前がこの力に誤れば誰かが死ぬ。わかったらしっかり仕事しろよ、次お前がもしジゼルじゃなくなったら、…」

「わかってる…せつな雪那にはこんなこと…させられないもんね…」

ガラツ、と病室の扉が開き、看護婦が現れ、回診の時間となった。

海斗は椅子から立ち上がると、適当にカゴを冷蔵庫に投げ入れ、春斗に背を向けたまま続ける。

「でもまあ、無茶はすんなよ」

「…うん」

看護婦に礼を述べながら、去り行く海斗に、嬉しそうに目を細めていた春斗だったが、海斗に振り返った看護婦がニコニコしながら尋ねた一言に、つい声を出して笑ってしまう。

「彼、弟さん？しっかりしてるわね」

慣れた一言だったが、今は尚更、可笑しく聞こえるのだった。

「春斗ー！無事か？」

翌日、通常の面会もできるようになった春斗は、真っ先に訪れてきた慧を歓迎した。

何だかんだとはいっても、幼い頃からの友達だからか、慧も春斗の趣向などを理解している。その手には見覚えのあるプリンのカゴが握られていた。

「ほら、お前の好きなパワフルプリンくん、十個セット！」

「あ、…ありがとうございます…」

やはり彼は友人ではなく腐れ縁だ、握られていたプリンを見てそう思ったものの、春斗は少し、嬉しそうに椅子を勧めた。

「座ったら、こんな遠い病院まで悪いなあ…」

「いいっていいって、最近ジゼルの予告もないから暇だしさー！」

「あ…えっと、うん…」

まさかジゼルが目の前で入院してるとも知らないだろうから言うのだが、そんな一言には実はバレているのでは？と時々肝を冷やされる。冷蔵庫にプリンを入れようとする慧を引き止めると、ぱっと慧

のポケットから手帳が落ち、バサッ、と春斗の視界に新聞の切り抜きが舞い上がった。

「これ…ジゼルの？」

「そう、全部とつてあるんだ、ファンだからな」

「そっか…ん…？」

舞い散った新聞切り抜きの一枚がふと春斗の視界に入る。ほとんどジゼルの記事に押されていたが、春斗の目に入ったのはその記事ではなく、その下に小さく載った男の写真だった。

「ねえ、この人誰？何だか見たことがあるんだけど…」

「ん？ああ、この人この近所に住んでる骨董マニアだよ、名前はお大隈達也。おくまたつや変なオジサンでさ、性格悪いことで有名なんだ。このオジサンがどうかしたのか？」

「いや、見たことあるから気になって…」

「よく道で人にわめき散らしてるからなー見たことあるのかもよ。」

この人。ジゼルに狙われない為に家を改装したんだぜ？」

恰幅のいい姿は見るからに金持ちそうではある。骨董マニアともなれば、目の敵にされているかもしれないが、それ以外に、この男を何処かで目に行っている気がしてならなかった。

春斗はじっくりとその記事を眺めていたが、慧に記事を返し、海斗に尋ねてみることにしてそのことは一度、頭の隅に追いやる。

彼の骨董品が次のターゲットになったのはそれから間もなくの事だった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3101y/>

怪盗ジゼルの慌しいお仕事

2011年11月10日05時46分発行